

光陰似箭

辛亥百年

(東京大学) 村田 雄二郎

今年は辛亥革命百周年にあたり、各処でこれを記念する会議が開催される。日本でも11月には神奈川大学などで国際会議が、そして12月には東京と神戸で「辛亥革命百周年記念日本会議」主催の国際シンポジウムが開かれる予定である。

十年の節目ごとに学術会議を開く辛亥の「記念史学」がはじまったのは、1961年の50周年からではないかと思う。その後、事実上はじめての国際会議となったのは、1981年に武漢で開かれた70周年記念会議であった。ちょうど中国が対外開放をはじめた時期で、武漢会議には多くの外国学者が参加し、以降本格化する学術交流の礎となった。70周年記念が、辛亥革命研究をこえて、日中の学術往来に予想外の大きな波及効果をもたらす転機になったことは、先輩筋から何度も聞かされてきた。とくに、海峡兩岸の学者が「対面」する最初のきっかけとなったという点でも、1981年の会議は画期的な出来事であった。

以来、80周年、90周年と「記念史学」は定着し、今年の百年に至るわけだが、百年という時間は抽象的な計量単位をこえて、生きた「歴史」感覚に訴える効果もあるようだ。辛亥革命から百年の時がすぎ、中国はどのように変貌したのか、革命の課題はどれだけ果たされたのか、日本が中国を見るまなざしはどう変わったのか、東アジアの過去百年の歩みは未来にどうつながるのか…等々。今という地点から、現代中国の起点になった辛亥の年へと問いの連鎖が及んでゆくのは、歴史に息づく精神の自然なはたらきだろう。

そういうわけで、われわれ日本の研究者有志は、昨年3月に「辛亥革命百周年記念日本会議組織委員会」を立ち上げ、今年の12月3、4日に東京大

学駒場キャンパスで、また12月10日に神戸大学で国際シンポジウムを開催することにした (<http://www.shingail00japan.jp/>)。神戸会議は孫文記念館との共催である。また、これにあわせて、(財)東洋文庫で12月2日に特別講演会を開催し、新設されたミュージアムでの特別展示を企画した。そこには、門外不出の宮崎(滔天)家文書など貴重な文物がお目見えするはずである。

東京会議が掲げた全体テーマは「グローバルヒストリーのなかの辛亥革命」である。辛亥革命を国際的文脈のなかに位置づけ、日本を含めた外国や「辺境」との関係で、また横の比較の視点を取り入れながら、中国に起こった「革命」の意味を再考しようという趣旨である。さらに、辛亥革命百年は、同時に中国の立憲・民主百年でもある。辛亥革命を媒介に、中国「民主」の来し方・行く末を考える機会ともなるだろう。

かつてブルジョア革命か郷紳革命か、革命の性質に関わる議論が熱く交わされたこともあった。今日では、一元的な枠組みで革命を定義・解釈するよりは、より多元的な認識枠組みが好んで語られる。たとえば、辛亥革命はいつ起こったのか、1919年10月10日(武昌蜂起)なのか、12年1月1日(中華民国臨時政府成立)なのか、あるいは2月12日(清帝退位詔書発布)なのか。また、その終わりはいつなのか、1913年(第二革命)なのか、1915年(第三革命)なのか、それとも1924年(北京政変)なのか。革命派ではなく、清朝宮廷や北洋派(袁世凱)から見た場合、革命記念日は2月12日であり、馮玉祥軍が「小朝廷」の溥儀を追い出した1924年こそ革命の終わりだという見方になるだろう。しかもそれは、国民革命という別の革命の始まりであった。従来の革命党中心史観を脱した新しい辛亥革命像を、国内外の第一線の学者がどのように描き出すのか、注目される。と同時に、公募で選ばれた若手クラスのフレッシュな報告にも大いに期待したい。